プラトンのドクサに就いて

杉　正　俊

Wer auf Platon hinsieht, der hat die ewigen Themata der Philosophie im Auge!　E. Lask

通常プラトンの δόξα として世に傳へられて居るものは、主としてパイドン、シムポジオン、ポリテイア等の對話篇に現れて居るドクサであるが、これは彼の成熟期の思想卽ち後期諸篇に於けるドクサとは其意味の上に於て相當甚しい隔りがあるのである。從來プラトンのドクサとして彼の敎說に歸せられてゐたところのものは、實は彼が尙ソクラテスの影響を脫してゐなかつた初期の時代の思想であつて、決して彼自身のものではなかつたと考へられる。私は、此のソクラテス的なドクサと眞のプラトン的なドクサとがその意味內容に於て如何に相違して居るかを闡明して、本來のプラトン思想が後期諸篇に存する所以[1]を基礎付ける一端とすると共に、それの認識論的な意義を考へて見度い。

一

ペルシャ戰爭後史家の所謂啓蒙期(紀元前五世紀後半)に於て希臘の思想界は實に拾收すべからざる混亂に陷つた。そこでは人々は眞理を失ひ、信仰もなく權威もなく、唯皮相な喧傳的な知識が市場に氾濫するのみであつた。『知慧の敎師』ソピステス達は此の時流に投じて現れ、學問を以て職業となし、謝金を取つて人々に實利的な知識や修辭辯論の術を敎へたのであるが功名に燃え知識に渴した青年達は所謂『物知り』にならんと競つて彼等の許に集つた。茲に於て之等『語るに畏るべき』自稱賢人達は到る所に橫行して、徒に言辭を巧妙にし詭辯を弄して彼等青年を說服し、人心に迎合する思想を唱へて益々時代を混亂に惑はし歩いた。此の時！此の俗流的賢者達のただ中に、輕佻亂雜を極めた當時の風潮に反抗して、敢然として奮ひ立つた者が我がソクラテスであつた。

デルポイに於けるアポロンの神殿高く揭げられた警句・"Γνῶθι σαυτόν"を體得し無知の自覺(οἶδα οὐκ εἰδώς)に到達したソクラテスが此の紛糾せる時勢から希臘精神を救はんとして第一に爲したところのものは、ソピスタイの似而非知識を叩きつぶし、人々の δόξα を剝奪してその無知を知らしめることであつた。彼は先づ δοκεῖν

(又は δοξάζειν・思ふこと)と εἶναι 又は εἰδέναι (事實あること、知ること)、δόξα (臆見、俗知)と ἐπιστήμη (知識、眞知)とを峻別し、彼等の有するドクサが決して眞知でない所以をディアレゲスタイのメトドスによつて自覺せしめ、よつて以て彼等を新しく哲學的研究に向はしめた。[2]

吾々は此の二つの言葉の嚴密な對立を『ソクラテスの辯明』の到る所から讀み取るであらう。例へば二一 c に於ては、δοκεῖν μὲν εἶναι σοφὸς……εἶναι δ' οὔ. δοκεῖν τι εἰδέναι οὐκ εἰδώς. として δοκεῖν と εἶναι 又は εἰδέναι とは明かに對立させられ、二九 a、四一 e に於ても δοκεῖν γὰρ εἰδέναι ἐστὶν ἃ οὐκ οἶδεν. δοκοῦσί τι εἶναι μηδὲν ὄντες. とあつて此の二語は嚴然と區別されて居る。斯くてソクラテスに於ては δόξα は「事實知らないことを知つてゐると思ふこと」であつて、ἐπιστήμη とは正反對の、否却つてそれの開展を妨げるところの迷蒙偏見と解せられ、俗知俗見といふ卑しめた輕蔑的な意味が附與せられてゐたのである。

(1) 私はキャンベル以來の、プラトン對話編に於ける語彙文體の着實な語研究に基いてテアイテトス、パルメニデス以後を後期と考へ、それ以前の諸篇と區別する。

Vgl. L. Campbell; The Sophistes and Politicus of Plato (1867), Introduction.

W. Lutoslawski; The Origin and Growth of Plato's Logic with an account of Plato's Style and of the Chronology of his Writings (1897).
〃　（河野與一氏譯）プラトーン對話篇年代決定の新方法（哲學論叢、二四）
J. Burnet; Greek Philosophy Part I (Thales to Plato).
〃　Platonism (1928).
A. E. Taylor; Plato, The Man and his Work (1926).
〃　A Commentary on Plato's Timaeus (1928).
C. Ritter; Untersuchungen über Plato (1888).
〃　Platon, sein Leben, seine Schriften, seine Lehre I (1910), II (1920).
〃　Die Kerngedanken der platonischen Philosophie (1931).

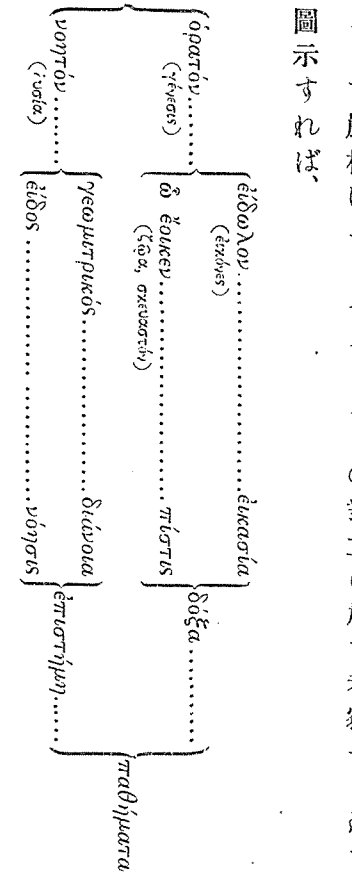
拙稿プラトンのイデアに就いて（哲學研究第百六十四號）

（2）眞の哲學的精神は世の所謂巧智な賢者達（σοφοὶ ἀνδρες）には決して存するものではない。何故ならソクラテスが正當にも敎へたやうに、自らの無知を知り、知らざることを知らずとするとさ卽ち無知が事實內容に就いて知られる時、こゝに初めて哲學的研究は起るのであるから。

二

偉大なるソクラテスの人格に感激し、彼の深き感化影響の下に育まれた若きプラトンが、師の中心的思想の一つである『ドクサ』の意義に就いてもその影響を免れなかつたのは當然である。吾々は彼の初期中期の所謂詩的諸對話篇に於て『ドクサ』に關

し此のソクラテス的な意味が可なり濃厚に表明されてゐるのを見出すことができる。私はその典型的な例としてポリティアVI五〇九d——五一一e[1]、VII五三四aを擧げよう。そこではドクサは『宛も二分された線の如くに』エピステーメから切斷（τέμνειν）せられ、思惟（διάνοια）よりも下位、想像（εἰκασία）と信念（πίστις）とを包含するものとして嚴格にエピステーメとの對立に於て考察せられて居る。いまこれを簡單に圖示すれば、



卽ちプラトンに於てもその初期中期の諸篇に現れる『ドクサ』は、感性的從つて主觀的な『臆見』といふ意味を有して概念的な認識・エピステーメからは劃然と區別せられ、その價値は全然認められてゐないのである。[2]『ドクサ』は臆測又は誤まれる信念を意味するが故に、それの一切は恥づべきもの（ὡς πᾶσαι αἰσχραί）であり、それの最善のも

のでさへ盲目である（ὃν αἱ βέλτιστα τυφλαί……Politeia, 506c）のである。

（1）ポリテイアの此の箇所（510bff.）に對するナトルプの解釋（Platos Ideenlehre, 2 Aufl. S. 193ff.）は、ハンス・ライゼガンクがカントの純粹理性批判の原文（Kritik d. r. Vernunft, B. S. 672ff.）と一々比較して指摘論難したやうに、（就中 ἀσυς の解釋に於て）餘りにもカント的である。着實な文獻的研究を無視してプラトンを無理にカントへ結付けんとする新カント派の人々の金には、勿論吾々は賛成できない。（先年ホフマンとリツケルトとによつて『ハイデルベルク哲學及哲學史論叢、第十三卷』として出版されたテオドーラコプロスの『プラトンの存在の辨證法』（J. Theodorakopulos, Platons Dialektik des Seins, 1927）の如きも、マールブルク學派に對應する西南ドイツ學派のプラトン解釋の試みであつて、プラトンのイデア說に投入するにリツケルトの價値又は文化哲學の概念を以てし之を甚しく歪曲して解釋したものに過ぎない。吾々はライゼガンクと共に、文獻的良心を疑はしめるやうなかゝる「不快な」『堪へ難い』『非希臘的な』解釋を極力排斥せねばならない。）

併し又他方プラトンに於てカントの思想とは全然相反するものを見るライゼガンクの論旨も亦正當とは云へないであらうプラトンに於ては『カントとは全く反對に抽象の國へ昇れば昇るほど吾々は次第にアルケー（卽ちイデア）に近づき、そして具象的な世界に降れば降るほど吾々は次第にドクサの國、單なる想像臆見の國に屬す』のであらうか。假令上記のポリテイアの箇所が斯く解釋されるにしても、かゝる思想が果して成熟した後期の（そして本來の）プラトン哲學に當て嵌まるであらうか。

Vgl. H. Leisegang; Die Platondeutung der Gegenwart, 1929.

（2）シムポツオン二〇二a、ポリテイアV四七七a、四七八dに於ては、ドクサは知識と無知との中間者（μεταξὺ a）εἶναι と μ.) εἶναι とを俱有するもの（μεῖγον）とされ、從つてエピステーメとの對蹠性も幾分緩和せられて居るやうにも見えるが、併しその積極的な意義は尙認められず依然として輕蔑的・反價値的な意味が含まれて居るのである。

三

然るに成熟期のプラトン哲學、卽ち發展し成熟せる彼の思想を包含してゐるところの後期諸篇に於ては、『ドクサ』の意味內容は之等とは可なり趣を異にして居る。こゝでは最早臆見臆斷といふやうな輕蔑的な意味は解消せられて、その本來的な意味、卽ち言葉通りに單に『思念されたもの』『思斷したもの』といふ意味のみが附與せられ、從つてそれに對して正當な關心と尊重とが拂はれて居る。[1] いま參考のためにプラトン自身による『ドクサの定義』を擧ぐれば、テアイテトス一八九e—一九〇aには『思惟(διανοεῖσθαι)とは精神(プシケー)が或る探究すべき對象に就いて自問自答し肯定し否定しつゝ自らと對話(ディアレゲスタイ)することであるが、それが—推斷の過程の遲速は兎も角—決定(ὁρίσασα)して最早疑はぬ時吾々は之をプシケーのドクサであると措定する。從つて、少くとも私は δοξάζειν を λέγειν であると呼び、ドクサを語られた—他人に對して聲を以てではなく—自らに對して無言で語られたロゴスであると云ふ。』とあり、又ソピステス二六四a—bに於ては『精神の中に於て διάνοια によつて(沈默を以て)肯定と否定との起る時之を δόξα と名付ける。ドクサとは思惟(διάνοια)の結末(ἀποτελεύτησις)である。』と定義されてゐる。[2]

卽ち之等の後期諸篇に於てはソクラテス的な頑迷なドクサ(σκληρὴ δόξα)は純化

(καθαίρειν) せられ、プシケーの一つの作用としての本來的語源的な意味に淨められて居る。而もそこには或る事物に就いて單に思念し思惟するといふことの外に措定的に働くといふ意味が加へられ、明かに思斷又は判斷 (κρίσις) といふ積極的な意味が與へられて居るのである。[3] 從つて δοκεῖν 又は δοξάζειν とは、ないものをあると、知らないことを知つてゐると、思ひ信ずるのではなくて、ただ或る事物に就いて單に思惟し思斷するといふプシケーの一つの作用に過ぎないのである。[4]

斯くしてプラトンの δόξα が單に δοκεῖν (又は δοξάζειν) されたものを意味する限り、その結果としてドクサの中に ψευδής と ἀληθής との二種が生じて來るのは當然である。單にドケインされたものには正しく思念されたものと誤つて思斷されたものとがなければならない。そして此の兩者があるならば正しい思斷 (ὀρθὴ δόξα) と誤まれる思斷 (ψευδὴς δόξα)、眞なる思斷 (ἀληθὴς δόξα) と僞なる思斷 (ψευδὴς δόξα)[6] とを判別 (クリネイン) するところのものは何であらうか。眞僞の規準 (κριτήριον) は何であるか。茲に於てプラトン哲學は必然的に認識論上の問題に入らざるを得ないのである。私はプラトンの『ドクサ』の意味をいま少し精細に考察し同時にその認識論的な意義を探るべく、プラトン後期思想の出發點[7] と考へられるテアイテトス篇に立入らう。

(1) Campbell, The Sophistes and Politicus of Plato, Introd. to the Statesman lii, A. E. Taylor, Plato: The Man and his Work p. 339—340.

(2) ひとは之等の δίκαια, 及び δίκη とポリテイアに於けるそれ等とを比較せよ。尙ソピステス二六〇b c、ピレボス三八eに於ける δίκαια, δίκη, λόγος の意味並にそれ等の間の關係を參照せよ。

(3) テアイテトス一七〇d、一七八d等に於て δοξάζειν と κρίνειν とは同義に使用されて居る。

(4) 否、それのみではない。ポリテイコス三一〇eに於ては『美しいもの善きもの等に關する唯一なるドクサ（μία δόξα）』と語られ、ドクサに對して規準とかイデアとかいふ非常に重大な意味さへ與へられて居るのである。

若しも吾々が、その場合々々によつて色々の意味に使用されて居る εἶδος, ἔννοια, ἰδέα πάθος, ἐπιθυμία ἐπιστήμη, λόγος, δίκη, ἐλπίδες, ἀναμνήσεις, δόξα 等の言葉を、プラトン對話篇の悉くの場合に就いて綿密に比較類別し或は之を統計的に研究するならば、從來傳へられて居る所謂『プラトン哲學』を匡正しそれの本來の姿を摑むにあづかつて役立つであらう。

(5) Philebos 36c, 37b10—c3, Theaitetos 161d, 187b—c (Vgl. Aristoteles, Ethica Nicomachea III1b, 33).

(6) この正（ἐρθή）といふ言葉と眞（ἀληθής）といふ言葉とは、それ等に對應する誤及び僞（何れも ψευδής）といふ言葉と共に、一は概念判斷の價値を表はし他は實在判斷に屬するものとして區別さるべき言葉であらうが、プラトンは兩者を混用して居るから暫くそのまゝにして置く。

(7) Vgl. H. Jackson; Journal of Philology X. 253ff. XIII. 242ff.)

J. Burnet; Greek Philosophy I. p. 155, 235, 242.

〃 Platonism, §4 (The Academy and Aristotle).

H. Fowler; Introduction to Theaetetus p. 4.

H. Raeder; Platons philosophische Entwicklung, S. 280, 336, 423.

C. Ritter; Die Kerngedanken d. platonischen Philos. S. 7—12, 105.

四

人々の知る如くテアイテトス篇の主題はエピステーメの問題である。併しそれは(心理的に)知識が如何にして生起するか (ὥτινι τρόπῳ τοῖς ἀνθρώποις παραγίγνεται;) を問ふのでもなく、又(論理的に)對象の認識が如何にして可能であるかを基礎付けるのでもなく、却つてそれ以前に問はるべき課題であるところの知識とは抑々何であるか τί ποτ' ἐστὶν ἐπιστήμη;[1] を問題とするのである。勿論それは第二次的に知識の性狀 (ποῖόν τί ἐστι; 196d) とか所屬とか數量とか (τίνων ἢ ἐπιστήμη, οὐδὲ ὁπόσαι τινές, 146c) を問ふのではなく、直に知識の本質問題 (ἐπιστήμη αὐτὸ ὅτι ποτ' ἐστιν) に突入りその定義を探究するのである。而して、認識の可能を論ずる前に認識の事實を直視しその本質如何を問ふ者にとつては、眞なる知識の外に虛僞の認識といふ厄介な事實 (ψευδῆ δόξαν εἶναι, Sophistha 236e) が必然的に考慮に來らざるを得ない。從つてプラトンの知識論に於ても眞理の問題と共に虛僞(又は誤謬)の問題が前面に現れて來て彼を惱ましし、前者と同等の權利、同等の重要性を以てその解決を迫つてやまぬのである。[2] 虛僞とは一體如何なるものであるのか。それと眞理との差は何處にあるのであるか。こゝに於てプラトンは眞僞の規準 (κριτήριον, μέτρον) といふ問題を捉へ、それを知識研究

の中核的な問題と考へてその解明に全力を傾倒する。何故なら此の事によつて初めて知識の本質（τὸ τί ἐστι）は明かになるのであらから。併し乍ら『今も昔も常にアポリアに充ちた』此の認識論上の最も重要なそして又最も困難な問題に對して、明快な解決を與へそれの『ロゴスを摑む』（λόγον λαβεῖν）といふことは、勝れたる哲學者・プラトンにとつても決して『容易なこと』（σμικρόν τι）ではなかつた。テアイテトスの全篇は實に、この問題に對する彼の苦鬪を物語る慘憺たるドキュメントに外ならない。

そこに於てプラトンは先づプロタゴラスの感覺論（ἐπιστήμη＝ἄισθησις）即ち有名な彼のホモ・メンスラの說・ἄνθρωπος ἐστιν πάντων χρημάτων μέτρον, τῶν μὲν ὄντων ὡς ἔστι, τῶν δὲ μὴ ὄντων ὡς οὐκ ἔστιν.（人間は萬物の尺度である。有るものについては有るといふことの、有らざるものについては有らずといふことの）を捉へ來り、之を徹底的に批判し、その凡ゆる矛盾撞着を指摘してそれの誤まれる所以を論證する。斯くてこの對話篇の前半は殆んどプロタゴラスの感覺論（從つて相對論）の批判論駁に捧げられ、それによつて單なる感覺は決して知識ではないといふことが充分に證明された。今若しこれが初期中期の對話篇であつたならば、吾々はこゝに於て直にプラトン自身の所說を聽くことが出來たであらう。何故なら彼の得意な形相說は簡單に此の問

題を解明し得たであらうから。[3] 然るにここでは彼は形相說を決して提出せず、飽くまでも根本的な解決を求めて深刻な思索をつづけて居るのである。彼は云ふ、吾々はこれまで『認識してゐる』"γιγνώσκομεν" とか『認識してゐない』"οὐ γιγνώσκομεν" とか『知識してゐる』"ἐπιστάμεθα" とか『知識してゐない』"οὐκ ἐπιστάμεθα" とか、宛もお互にそれ等を理解して居るかの如く、一萬遍 (μυριάκις) も云つて來た。併し吾々はそれ等が如何なることであるかは少しも知つてゐない。それ故吾々は論(ロゴス)を最初からやりなほし (πάλιν ἐξ ἀρχῆς) 知識の根本に立返つてそれの τί ἐστιν; の研究をばなすべきである。だがそれは何處に於てであるか。感覺に於て知識を研究することの無益なることは、以上プロタゴラスの敎說の批判が吾々に充分敎へた。從つて『吾々は精神がそれ自體に於て存在 (τὰ ὄντα) に携はるときにもつところの夫(か)の名前——δοξάζειν (思斷)のもとに於て知識の τί ἐστιν; を探究せねばならない。(一八七 a)』斯くして彼は先づ第一に知識を眞思斷である (ἀληθὴς δόξα = ἐπιστήμη) と想定し、[4] 此の豫想の下に知識の根本に立返つて判斷の吟味研究から進めてゆくのであるが、先づ判斷に眞僞のあることを考へ誤まれる判斷の眞相を解明せんと志す。卽ち彼は、彼が以前プロタゴラスの感覺論の反證の一として擧げたところの ψευδὴς δόξα の存在する事實を省

み、この問題に對する平素の重苦しい不安困惑（θρίττειν, ἀπορία）を一掃すべく、斷然彼の恐れる無限の仕事（ἀνήνυτον ἔργον, Soph. 264c）に着手するのである。

プラトンはテアイテトス一八七d以下に於て『誤まれる思斷とは抑々何であるか』の探究に入り、知、不知、感覺、不感覺、の四種の因子（ファクトル）の中その二つづつのコンビネイション十六を展開し、その一々の場合に就いて僞思斷の可能か否かを綿密に檢討する。而して其の際『知る・εἰδέναι』といふ言葉が曖昧に使用されて多少詭辯に似た論もないではないが、結局誤まれる思斷は思惟と感覺との結付く所に（ἐν τῇ συνάψει αἰσθήσεως πρὸς διάνοιαν）生ずといふ結論を得る。[5] 即ち ψευδὴς δόξα とは感覺に對する思惟の錯交（διανοίας πρὸς αἴσθησιν παραλλαγή, 196c）であつて、ひとが何等かのもの（τι）をドケインし而もそれが斜に曲つて（εἰς πλάγια καὶ σκολιά）その思念された對象を外れ、（ἁμαρτάνων ὃν ἐσκόπει, 189c）思はざる（παρὰ δόξαν）他のものによつて充たされる時に起るのである。それは宛も靴を履く人が左右を取違（パラクサース）へて履き又下手な射手が矢を放つて的を外（パラクサイトウ・スコプウ）れるが如く、的はづれのもの（ἁμαρτανόμενον, Philebos 37）であり、誤つて當つたもの（ἀποτύχον）である。換言すれば誤れるドクサとは ἑτεροδοξία（193d）又は ἀλλοδοξία（189c, 190d）に外ならない。

斯くて僞思斷の研究の結果、消極的ではあるが眞思斷の眞相が分明になつた。卽ち吾々が若しAをドケイン(又はドキサーゼイン)してBに當つた場合、斯かるヘテロドキシアが誤まれるドクサであるならば、正しきドクサとはAを思念して而も之にまともに(καταντικρὺ καὶ κατὰ τὸ εὐθύ)當り、それによつて事實このAを掴(ランバノウ)んでゐるが如きものでなければならない。併しながらAを思念して果して眞實のAに當つてゐるか否かといふことは何によつて明かなのであるか。眞思斷(アレテス・ドクサ)にはその根據がなければならない。ἀληθής のアレテスなる所以を證明(あかし)するものがなければならない。斯く考へてプラトンは ἐπιστήμη=ἀληθὴς δόξα を補正するに ἐπιστήμη=ἀληθὴς (又は ὀρθή) δόξα μετὰ λόγου 201d, 206c) を以てする。[6]

併し又このロゴスとは一體何を意味するのであるか。眞思斷をあかしし、それを權威づけ (κυρίας ποιεῖ) るところの此の『λόγος』とは抑々何であるのか。こゝに於て吾々は先づプラトン自身からロゴスの定義—それの τί ἐστιν; を聽かねばならない。プラトンはテアイテトス二〇六c以下(特に二〇八c)でロゴスに次の如き三つの定義を與へ、それの一々を上記の定式に當て嵌めてそれによつてエピステーメを解明せんと企てて居る。

一）表現性。ロゴスとは何等かの對象を思斷（ドクサゼイン）し之を聲に發したもの、云はば『音聲の上に於ける思惟の形像（διανοίας ἐν φωνῇ ὥσπερ εἴδωλον）である。詳しく言へば『プシケーからの流（ῥεῦμα）が口を通つて聲を以て流れ出る時これがロゴスと呼ばれる（Sophisths 263e）』。卽ち內なる言葉ドクサを、宛も鏡又は水へのやうに口に通ずる流へ映しつつ、主語と述語とを有つ音聲によつて思惟を表明すること（τὸ τὴν διάνοιαν ἐμφανῆ ποιεῖν διὰ φωνῆς μετὰ ῥημάτων τε καὶ ὀνομάτων）——これがロゴスなのである。それ故ロゴスとは『存在に就いての音聲による表現（τὸ τῇ φωνῇ περὶ τὴν οὐσίαν δήλωμα）』に外ならない[7]。從つて生ける言葉（ἔμψυχος λόγος）—吾々のロゴスとは存在の類に屬する或る何ものか（τὸν λόγον ἡμῖν τῶν ὄντων ἕν τι γενῶν εἶναι）である。（二）根據性。ロゴスとは思念された對象を分析してそれの要素を求め、之によつてその對象を解明すること、卽ち宛もシラブルを文字によつて說明するが如く『それぞれの事物に就きそれの要素による基礎的說明（τὴν διὰ στοιχείου διέξοδον περὶ ἑκάστου）』をいふのである。それは云はば『要素によつて全體に至る道行き』であつて『名前（卽ち要素（ストイケイア））を編み合はすこと』それが『ロゴスの本質（ὀνομάτων γὰρ συμπλοκὴν εἶναι λόγου οὐσίαν）』なのである。（三）表徵性。ロゴスとは思念された存在をそれの有する特異な表徵によつて言表することである。卽ち或る事

物に就いて、それを他の凡てのものから區別する所以のもの卽ち種差（διαφορά）を擧げて說明すること—この『差異性の言明（ἡ διαφορότητος ἑρμηνεία）』がロゴスである。

テアイテトス篇に於ける以上三つの定義によるエピステーメの解明は、併しながら、彼が何故にか心理的說明を以てするが故に、何れも矛盾に陷り結局『認識＝ロゴスをもつ眞思斷』の證明は失敗に終つて居る。斯くて吾々は眞僞の規準に對してテアイテトス篇からはもはや明確な解答を聞くことは出來ない。こゝに於て人は或は次の如く推論するかも知れない。プラトンは ἀληθὴς δόξα を、彼が曾てメノン篇で語つたやうに、人間の本性にはない（οὐδέτερον φύσει ἐστὶν τοῖς ἀνθρώποις, 98c）神的賦與（θείᾳ μοίρᾳ, 99cff.）のものであるとして神的なものに逃れたのである。何となれば一般に理論の途絕する所に神話（ミトス）を語るのが彼の常であるから。併し乍ら眞に『學を愛し』齡八旬に至るまでひたすらに眞理を求めて倦むことを知らなかつた（ἐρᾶν τοῦ ἀληθοῦς καὶ πάντα ἕνεκα τούτου πράττειν）哲學者（ピロソポス）プラトンが、果して尙メノン篇に於けるが如き若き日の未熟な思想にとゞまりそれに滿足したであらうか。かかる怠慢な企が最後まで努力をつづけて『書きながら死んだ』（scribens mortuus est—Cicero, de Senectute V. 13.）

とさへ云はれて居る彼の哲學的精神にふさはしいであらうか。徒らに神祕の蔭に隱れそこに安住するといふが如き斯かる怠慢な行爲は少くとも彼の精神を跡づけんとする眞面目なプラトン學徒にとつては到底許されない事柄であらう。[8] それ故吾々は彼が吾々に遺した（ἀφεῖσαν ἐν κοινῷ ζητεῖν）志を繼ぎ、テアイテトスの研究を基礎として更によりよきものを孕む（ἄλλων βελτίονων ἐγκύμων γίγνεσθαι, 210c）ために此の研究をつづけねばならない。

（1）ἐπιστήμη ἔστι ποτ' συγγένεια ἢ ἐπιστήμη ἐνεστί τι ποτ' ὄναν といふ言葉の使用されてゐる所もあり、Theaitetos 篇に於ては 145e, 146c, e, 147b, 148d, 184a, 196d, 200d, 210a 等至る所に現れて來る文句である。

（2）カントの認識論は眞理そのものゝ成立を一般的に立證し得るだけであつて、それによる時は吾々は虛僞（又は誤謬）の事實を例外として認めざるを得ない。併し虛僞が眞理の反對でもなく又その否定でもないとすれば、かゝる說に於ては虛僞を如何に考ふべきであらうか。虛僞とは眞理とは異つた範疇によつて成立するのであるか。否虛僞の範疇そのものが存在すると認むべきであるか。（カントは判斷から範疇を導き出した。然らば誤まれる判斷が事實存在する限り、虛僞の範疇も亦存在するのではないか。）斯くの如く、虛僞（又は誤謬）の問題はカントの認識論に於ても多くの難點を提供する。

（3）Vgl. A. E. Taylor, Plato: The Man and his Work, p. 348.

（4）Theaitetos 187c, 200e.

（5）Theaitetos 195d, Vgl. Sophistes 237a, 240d, 260c.

（6）此の命題はテアイテトスが曾て或る人から聞いたといふ形式で提出されてゐるので、後のプラトン學者達はこれを或はアンティステネスに或はピタゴラス學徒に歸して居る。が併しプラトン自身によつて既にメノン、シンポジオン等に於て同樣の思

想が敍べられて居り、又此處でも表面上は兎に角實質的には眞面目に論じられて居るから、プラトン自身が以前から抱懷してゐた思想であると考へて差支へないであらう。卽ちシムポジオン二〇二aに於ては『ロゴスを與へることの出來ない正しいドクサは ἀδόξους ἀρετάς であるが故にエピステーメではあり得ない。』とあり、又メノン八六a及び九七c以下に於ても『正しいドクサは常に動搖してゐて或る時は當り或る時は當らぬ(ἀστὰ μὲν ἂν ἀγαθὰ καὶ ὠφέλιμα)といふ風に現滅的であるから、ひとがそれを根據の推理 (αἰτίας λογισμῷ) によつて縛るまではエピステーメにはならない。正しいドクサはそれが問題とせられ (ἐπιστήμας ἐνεργάσασθαι) 縛られ (δεθῶσι) て初めて恒常的 (μόνιμον) なエピステーメとなるのである。從つて正しいドクサとエピステーメとの差異は此の縛る (δεσμῷ) といふ點に存する。……』と述べられて居る。

併し又一方吾々はメノン、シンポジオン篇に於ける之等の思想とテアイテトスの此の命題とが全然同一のものであると考へてはならない。何となれば之等の諸篇に於ける『ドクサ』とか『ロゴス』とかは假令その言葉は同一であつても、それ等の意味するところのものは必ずしも同一ではないのであるから。例へばテイラー (A. E. Taylor, Plato: The Man and his Work) は前者の場合にはドクサを『belief』ロゴスを『grounds 又は justification』と譯して居るに對し、テアイテトス、ソピステス等の後期諸篇に於てはドクサを『judgment』ロゴスを『discourse』と譯して之を區別して居る。又テアイテトスに於ては『正しいドクサ』とはドケイッした對象に事實當つて居るところのものを意味したに反し、メノンに於ける『正しいドクサ』は或時は當り或時は當らぬと述べられて居るのである。(尙ひとはメノンの『δόξαν』とポリテイコスの『δόξης』との間に於ける意味內容の著しい相違を比較せよ。)

尤もメノン、シムポジオンのこれらの箇所に於ては、ドクサは知識と無知との中間者としてそれに附着せる動搖的・主觀的な要素が剝奪・純化(カタルシス)されれば確定的・客觀的なエピステーメになる(パイドン九六bをも參照。)といふドクサの過程的・積極的な意味も表面上認められては居る。が併し、それにも拘らず之等の諸篇には依然として、エピステーメはドクサとは異る種類のものであるといふ信念がその根底に橫たはつて居り、『正しいドクサ』と雖もそれは理性を缺き (ἄνευ νοῦ) 恒常的(モニモイ)ではな

いが故に氣まぐれな盲目的なものに過ぎないと輕蔑されて、それに至當な價値や積極的な意味―それはテアイテトスに至つて初めて認められて居るのであるが―は拒否されて居るのである。メノン篇に於てもその最後に於ては『正しいドクサ』とエピステーメとの差異(τὰ ἀλλοῖα)をのみ強調し、これは我が貧しき知識の中の一つである(九八b)とさへ語つて居るのである。それ故に吾々が若しこれ等の言葉と上記のテアイテトス、ポリテイコスの言葉(又は『正しいドクサ』をエピステーメと同視して居るピレボスの終 66b の命題など)とを比較して考へるならば、『正しいドクサ』といふ同じ言葉が後期諸篇に於ては可なり異つた意味に用ひられて居るのを氣付くであらう。

要之、メノン、シンポジオン等のこれ等の箇所は後期諸篇に於て展開され、そして又一轉回さるべき思想の萌芽を含んで居ると見做すのが最も正當である。

(7) プラトンにあつては神秘的直觀や宗教的體驗は、それが如何に深遠な實在に關するものであつても、聲によつて語られ言葉によつて言表されぬ限り、哲學的に價値のあるものではないのである。知られない、語られない唯感ぜられるのみ (τὰ μὲν βέλτιστα καὶ ἐγγυτάτω ἐνόντα, ἀπόφητα δέ) の如きもの、即ち言葉をやり取りできない (μὴ ἐνδιατρίβον δοῦναί τε καὶ δέξασθαι λόγον) やうなものは、此の明るい希臘人には差當り哲學の問題ではなかつたのである。

(8) ヴィラモヴィッツ (Platon I S. 730) の如きは公式的に『神秘の支配する場合は常にせいぜい誤解されたプラトンである』とさへ云つて居る。

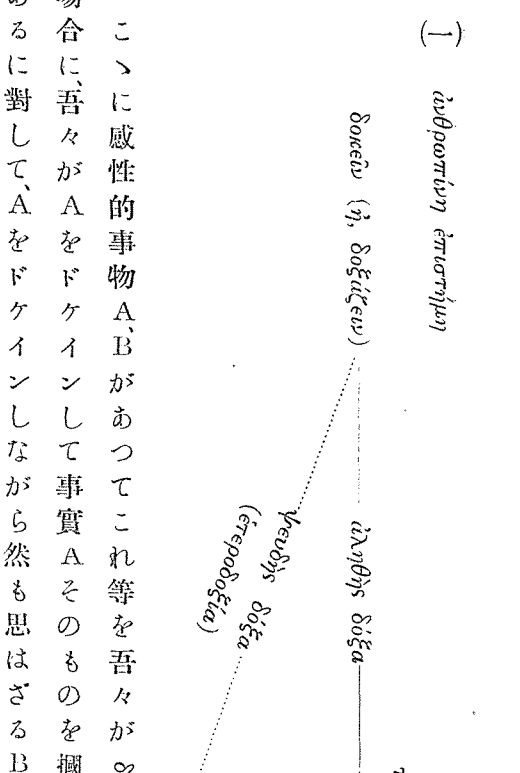
五

知識の問題に關して非常な期待を有ちながら而もその最後に至るまでプラトン

自身の明確な解答を聽くことが出來なかつたテアイテトスの讀者が、第一に目を向けねばならないところはポリテイコス篇の終であらう。そこには次のやうな注意すべき言葉が掲げられて居る。『……ὄντως οὖσα εὐηθὴς δόξα μετὰ βεβαιώσεως, 美なるもの、正なるもの、善なるもの及びそれ等に反對なるものに關して眞實に存在するところの確實性をもつ眞思斷……』吾々は先づこの語句の中に上記の問題卽ち眞僞の規準(クリテリオン)に對する解決の鍵が與へられてゐることを掴み、而して特に βεβαίωσις なる言葉に注意を拂ひつゝこの研究をつゞけて行かう。

上述の如く一方 δοξάζειν とは存在(オンタ)に關し精神自體のなす作用であつて、吾々が縱正當(オルトース)に或は不正當に思斷しようとも兎に角現實に(ὄντως)思斷してゐることを失はぬ如きものであるに對し、他方 τὸ δοξαζόμενον とは何等かの對象・τι を意味するものであるならば(ピレボス三七 a)、δόξα は吾々の作用と對象との間に成立つものでなければならない。[1] 從つて眞思斷の根據若しくは眞僞の規準もこの兩者の間の關係に於て求められねばならぬのは當然である。吾々は先づプラトン自身の考へ方に從つて　(一)對象の感性的なものである場合、卽ち彼の所謂『思惟と感覺との交はる場合』から考究を始めよう。いま便宜のためにこれを圖示すれば、

(一)



こゝに感性的事物A、Bがあつてこれ等を吾々が διάνοια によつて思念し思断する場合に、吾々がAをドケインして事實Aそのものを摑んだ場合がアレテス・ドクサであるに對して、Aをドケインしながら然も思はざるBに當りBによつて充された時にはそれはプセウデス・ドクサであるのである。卽ち僞思斷とは『思惟を感覺に錯交』して有と反對のもの卽ち有と異るもの (τὐναντία τοῖς ὄυσι=ἕτερα τῶν ὄντων=τὰ μὴ ὄντα· δοξάζουσα) を思斷すること、[2] 一言で云へば ἑτεροδοξία 又は ἀλλοδοξία に外ならぬのであり、之に反して眞思斷とは思惟(ディアノイア)がまともに對象(アイステータ)に當りその本質を摑んで兩者が正しく合致したところのものである。テアイテトス及びソピステス篇に於てはこのやうに說明されて居る。併しながら此の比喩的な言葉『當る τυγχάνειν』とか『外れる ἁμαρτάνειν』とか『摑む λαμβάνειν』とかは一體何を意味して居るのであるか。作用と對象との

合致は何によつてこれを證示するのであるか。私はこれ等の疑問に答へるものが上記の βεβαίωσις の考へであり λόγος の思想であると思ふ。ベバイオシスとは何等かの思念が思念された對象に於て自らを確證することであり、ロゴスとは此の體驗に於ける思斷の確かめを表現する (δηλοῦν) ことに外ならない。確實性をもつ眞思斷とは對象を在るがまゝに (ὡς ἔστιν) 捉へて居ることの確證をその對象に於て體驗したが如きものであり、而してこれを言葉に表現したものがロゴスをもつ眞思斷である。ドクサを認識とするところの、眞思斷の究竟の根據をあかしするものは此の確實性より外にはなく、眞僞の最後の規準(クリテリオン)は一に此の疑ふ可らざる (ἀνύποπτος) 體驗のベバイオシスに懸つて居る。而してこの確證は今の場合卽ち對象が感性的なものである場合には、それの本來の姿を原本的に捉へるところの純粹な直觀の體驗によつて行はれるのであるが、それが思念と殆んど同時に行はれる場合もあり又その間に時間の置かれる場合もあるのである。何となれば吾々は過去及び現在に關すること (ἐπὶ γεγονόσι, ἐπ' οὖσι) のみならず時としては未來に關すること (ἐπ' ἐσομένοις) をも現實に思斷する (δοξάζειν ὄντως) のであるから。從つてテアイテトス篇に於ける "μέλλον" に關するところのドクサは、その確證に時の經過 (ἀποβήσεσθαι) を要する云

はゞ動的な場合であると云ひ得るであらう。

斯くして得たところの確實性をもつ眞思斷はなほ第一の段階に於けるエピステーメであつて、これが(そして又これ等相互間の關係が)吾々の所謂經驗的知識(empirische Wissenschaft)[3] 卽ちプラトンの云ふ人間的知識(ἀνθρωπίνη ἐπιστήμη)に外ならぬのである。次にプラトンはこれ等の事實的な知識の外に更に高次の知識を認め、これを神的知識(θεία ἐπιστήμη)と名づけてその優越性を主張した。ではその神的知識とは一體如何なるものであるのか。こゝに於て吾々は夫の第二の段階に於ける知識の本質研究にすゝまねばならない。併し吾々はこゝに於てもやはりプラトン自らの考へ方に從つて攻究を進むべきである故、テアイテトス篇に於ける第二の場合卽ち對象が理知的なものである場合、彼の言葉に從へば感覺を交へない思惟のみ(μόνον διάνοια)の場合——これを考察に上せよう。勿論この場合は第一の場合とは多少趣を異にして居る。何となれば對象が『常に同樣であるが如き理知的なもの』に限られたデイアノイアのみの世界に於ては虛僞の判斷は平面的には起り得ず、たゞ立體的に二つ以上の對象を綜合する場合に於て初めて可能であると考へられるから。いま便宜のために以前の例に倣つてこれを圖示的に說明すれば、

(二)　θεία ἐπιστήμη,

νοητά (γεωμετρικά, εἴδη)

δοξάζειν (ἢ, συλλογίζεσθαι) —— ὀρθὴ δόξα ——→ $\overbrace{\text{A}+\text{B}}$ C (σύνθετον)

ψευδής ……→ C′

こゝに理知的な對象A、Bがありこれ等を推理綜合してCを得る場合に、それをCであると思斷せずして誤つてC′であると思斷した時にそれが誤れるドクサと呼ばるべきなのであるが、デイアノイアのみの世界に於てかゝる取違へ（μεταλλαγή）は如何にして可能であらうか。プラトンはこの理知的な對象の中先づその典型的なもの卽ち數（ἀριθμός）[4]の場合に就いて考察を始める。

δοξάζειν —— ὀρθὴ δόξα ——→ $\overbrace{\text{ἑπτά}+\text{πέντε}}$ δώδεκα　　7＋5＝12（正）

ψευδής ……→ ἕνδεκα　　7＋5＝11（誤）

彼は云ふ。『君は次のことをどう思ふか。ひとが何時か自分自身で五と七とを考察して――が併し僕は人間の五人と七人とを前に置いて考察することを謂ひするのではなく五自體と七自體（αὐτὰ πέντε καὶ ἑπτά）とを謂ふのであるが――この二つの和がいくらであるか（πόσα ποτ' ἐστὶν）といふことを自問する場合に、凡ての人はそれを十二であると云ふに反し或る人はそれを十一であると思ひ斷ずる……』而もより大きい數に於ては（ἐν πλείονι ἀριθμῷ）ひとはより多く誤る。』云々。[5] 卽ち吾々は五人の人間とか五本の指とかいふ感性的な數の場合は勿論、純粹な數自體に關してもその綜合の場合に於ては、事實屢々誤つて虛僞の判斷に陷るのであるが、[6] 此の事實は如何に說明せらるべきであらうか。プラトンはこれの說明に就いては行詰（アポリア）に陷つたと告白してゐるのであるが（一九六c、二〇〇a）、彼が此の場合に問題を純粹に『思惟のみ』の世界であると考へて感覺や想像の這入つて來ることを全然認めない限り、それは當然のことゝ云へるであらう。何となれば彼が他の場所[7] で言つて居るが如く如何なる意味に於ても『τὸ ἓν δύο の交らない』やうな純粹思惟の世界に於ては、誤謬（τὸ ψεῦδος）といふことは考へられないのであるから。否、感覺や心像による直觀の助けを少しも藉りないならば綜合といふこと自體も不可能になるであらう。十二は單

に七と五との結合を思惟したゞけでその和（πρόσθεσις）の概念から生ずるのではなく、[8] 又　5＋7＝12　に於てこれを十一と誤つて思斷する人はプラトンの考へるやうに5＋7＝12の十二そのものを十一と思ひ誤るのでもあるまい。要之、彼が飽くまでも『思惟のみ』の世界に閉ぢこもつて凡てを分析的・平面的そして又心理的に說明せんと企てる限り、彼のアポリアは必然の歸結と云へるのである。たゞ彼がこのやうな分析的な考へ方に禍ひされることなく、テアイテトスの終りの部分やソピステス篇に於てその一斑を現はし從つて明かに彼が豫覺してゐたと思はれるところの、綜合（σύνθεσις）とか全體（ὅλον）とかの思想に對して今少し精細に考究しその意味の闡明に努めたのであつたならば、恐らく彼は現代の人々が斬新な知識として感嘆して居るやうな思想を、既に二千三百年以前に於てそのまゝ抱懷してゐた眞に驚くべき思想家であつたであらうに。

扨てA＋B＝Cに於て、Cを單にABの和の概念から『思惟のみ』によつて生ずるとしたり、或は又誤れる思斷をなす人はCそのものを誤つてC′と思斷するかのやうに考へる限り、此の段階に於ける『誤れるドクサ』の解明は不可能である。こゝに於て吾々は、プラトンがディアノイア自體の世界に於ける誤れる思斷を省察して、或る對象

に關し『異が同として非有が有として語られる場合――惟ふに總じて主語と述語から生ずるかゝる σύνθεσις が眞實に（ὄντως τε καὶ ἀληθῶς）誤れるロゴスなのである』[9]と規定した時、この σύνθεσις といふ言葉に注意しなければならない。AにBを加へてCを得る場合、そのCは推理のみによつて生ずるのでもなく又單なるA、Bの集合や總計でもない。從つてそれは何等かの意味に於てA、Bと同次の對象ではないのである。[10] プラトンはこの事を文字と言葉、アルファベットとシラブル（τὰ τῶν γραμμάτων στοιχεῖα τε καὶ ἡ συλλαβή）との例によつて鮮かに演示して居る。いま ΣΚΩΑΤΡΕΣ なる七つのストイケイアを加へて Σώκρατες なる一つのシラベーを得る場合、その一つ一つのストイケイオン（要素）は單に音聲（ポネー）を有するに止まり各、それ自體に於ては（αὐτὸ καθ' αὑτὸ ἕκαστον）、在る・εἶναι, ἔστιν "とも、ない οὐκ ἔστιν "とも、これ τοῦτο "とも、かのもの ἐκεῖνο "とも何とも述語され（προσειπεῖν）得ぬもの（從つてそれ〴〵單獨には思惟せられない・ἄλογον・たゞ感せられる・αἰσθητόν のみのもの）であるが、それ等が（純粹な直觀によつて）一つに綜合（σύνθεσις）されて獨一なるイデア・μία ἰδέα を形成する時初めて一つの意味のある言葉（ロゴス）が生ずるのである。[11] 從つてシラベーはそれ〴〵のストイケイオンの單なる集合や總計ではなくて不可分析的な（ἀμέριστος）全き形姿でなければならない。

勿論それは各要素に制約されては居るが然も要素(ストイケイア)の集合とは異なる獨自な一つの形姿を自分自身のものとして有して居るのである。何となれば全體(τὸ ὅλον)といふものは決して單に部分を加へたものではなく、部分の總體(τὰ πάντα μέρη)とは異るところの一つの或る種類(ἕν τι εἶδος)であるから。[12]

斯くて第二の段階に於ける『誤れる思斷(プセウデス・ドクサ)』は第一の場合に於けるが如く單にCそのものをC′と思ひ誤ることではなく、理知的なストイケイアA、Bを綜合してCなる高次の對象を得る場合に(その際何等かデアノイア以外のものが這入つて來ねばならぬが故に)その綜合に於て誤つて之をC′と思斷したものである。從つて眞思斷とはこれ等を正當に綜合しCをCとして客觀的に思斷したものに外ならぬのである。だが併しそのことは一體何によつて明かなのであるか。正しい綜合、正しい思斷を證明(あかし)しこれを根據づけるものは何であるのか。近代的な頭の人は此の場合直ちに論理の法則とか、アプリオーリの綜合判斷とか、或は又思想それ自らの有する眞理價値とかいふやうなものを考へて問題を簡單に片付けるかも知れない。併し乍ら今少し突き詰めて考へてみるとき之等の解答には果して何等の疑問も殘らないであらうか。一切の認識判斷が論理の法則に據るのであるならば知識とは結局は單な

る同義反覆に終らないであらうか。次にそれが先驗的統覺によるアプリオーリの綜合であると云つても、綜合判斷の一切が悉く正しい眞なるものであると言ひ切る根據が何處にあるであらうか。更に又眞僞の規準は思想それ自らの有する眞理價値によるのであると云つても、その眞理價値とは一體如何なるものであらうか。それは如何にして吾々に認知されるのであるか。要之、人々が正しい判斷の正しさ、眞なる思斷の眞實さを如何に說明し如何なるものによつて之を根據付けようとも、與へられたものそのものに於て確證すること卽ち直觀的自證による體驗の事實を度外視しては到底解明し得ないのである。從つて吾々は凡ゆる反對にも拘らず端的に無技巧に、そして恐らくは思直にも（ἁπλῶς καὶ ἀτέχνως καὶ ἴσως εὐήθως）眞思斷の根據（アイデイア）に對しては依然として上述の"βεβαιώσεις"の思想を提起せざるを得ない。何となれば眞思斷の眞正さを證明（あかし）し眞僞の規準（クリテリオン）となるところのものは、その究竟に於てはやはり、與へられた對象自體に於ける精神（プシケー）自體の叡知的直觀の確證による外はないと信ずるから。否、この直觀的明證を認定せずしては一切の根據づけ一切の權利づけもその目的を完全に達し得ず、從つて結局不可能に終る外はないであらう。こゝに於て吾々はプラトンと共にたゞ聲高く次の如く叫ぶ（μέγα ἂν βοῴης）のである。——

何等かの思斷(ドクサ)が思斷された對象に於て自らを確證しそれを言表する時、それがすなはち『眞なる言葉(ロゴス)』であり『エピステーメ』であるのであると。

扨てアンティステネス及びその一派の無教養(アパイデウトイ)な人々は理智の窮乏によつて愚かにも (εὐηθῶς) 綜合判斷の不可能を主張し『人間は人間である』とか『善は善である』とかいふ同一律 (ἓν ἐφ' ἑνός) のみを許してそれ以外の (πλὴν τῷ οἰκείῳ λόγῳ) 凡ての命題を拒否する。[13] 從つてその結果矛盾(アンティレゲイン)又は誤謬といふことは殆んどあり得ない (σχεδὸν δέ μοὶ ἐψευδέσθαι) のである。之に對して自らピロ・ソポスを以て任じ飽くまでも知識の可能を信じたプラトンは、當然立つて之が排擊に向はざるを得なかつた。併し乍ら彼の以前(パイドン、ポリテイア)の形相說はこの問題に對して最早何等の解答をも提供し得ない。何故なら『エイドスの友』の主張するが如き敎說はエイドスの絕對性と孤立性とを認めねばならず、然も之を措定するときはディアレクティケーはその根底から崩壞し從つて知識の確立は不可能に終るであらうから。パルメニデス篇に於ける鋭い批判によつて自說の保持し難きを明かに看て取つたプラトンは、今や如何にすべきであつたであらうか。如何にすればディアレクティケーはその危機を免れ知識は『救はれ』るであらうか。形相說の抑々の破綻が "χωρισμός" (分離性)の偏重に

由來して居ることを強く意識したプラトンが、こゝに於て先づ結合といふことに着目し、上記のストイケイア(卽ちエイデ)の結合(δεσμός)關係を何よりも重大問題と見做してそれが解明に全力を注いだのは蓋し當然の歸趨と云はねばならない。從つてソピステス篇に於けるゲノス(=エイドス)の"κοινωνία"(結合關係)の研究は"κοινά"に關する推理の中に(ἐν τῷ περὶ ἐκείνων συλλογισμῷ). エピステーメを求めたテアイテトスの知識研究から必然的に進むべき道であつて、夫の『ディアレクティケーの知識』はこゝに初めて確立されるのである。それ故パルメニデス篇に於てひとたび危機に頻した吾々の知識はテアイテトス、ソピステス篇に至つてこゝに確實に『救はれ』たのであるが、併し乍らこの知識はその性質上、上述の第一の段階の知識とは區別せられねばならない。何となればそれは所謂『ディアノイアのみ』の世界に於ける『常に同樣なもの』(περὶ τὰ ἀεὶ κατὰ τὰ αὐτὰ)に關する知識であり、從つて第一の段階の知識よりは高い段階の『嚴密な(ἀκριβής)確實な(βέβαιος)』知識(エピステーメ)であるのであるから。換言すればこれは上記の第二の段階の知識に當るのであつて、これがかの純粹(καθαρός)精確な(σαφής)知識(=strenge, echte Wissenschaft, exact science)卽ちプラトンの所謂神的知識(θεία ἐπιστήμη, θεία τῶν ἐπιστημῶν)に外ならぬのである。[13]

斯くしてドクサの研究によつてプラトン哲學に於ける二つの知識——[16]——經驗的知識と理知的知識、彼の言葉を藉れば人間的知識と神的知識——の意味が明かになつた。併しながら此の兩者の關係はどうであらうか。この二つの知識が『切離(コーリス)され』た全然別の——從つてそれ〴〵は孤立無緣の——ものではなくて、その間に何等かの『結合關係』があるのであるならば、その關係は如何なるものであらうか。神的知識は如何にして人間的知識に結付き之の基礎となるのであるか。このことに對してはプラトンのテクストは最早適當な解答を與へてゐないやうである。私は彼が二三の箇所に於て暗示的斷片的に語つてゐる言葉から推して、恐らく第一の段階に於ける個々の知識の『關係』並に作用的な意味の『ペラス』が解決の鍵を與へるのであると思ふが、これに就いてはいま少し深く考へて別の機會に論じてみたい。

(1) Vgl. Theaithtos 163e, 197e Parmenides 132 b.c Sophisths 248d, Philebos 37a.
noc'l Vgl. C. Ritter, Die Kerngedanken d. plat. Philos. S. 110ff.
J. Stenzel, Metaphysik des Altertums S. 139ff.

(2) Sophisths 240d, 263b, 237aff., Theaithtos 188d.

(3) Vgl. E. Lask, Platon (Gesam. Schri. III. S. 29ff)。二はシンポジオンの λογὸν διδόναι に他はポリテイア、パイドンの ἱκανὸν に重心を置く夫のラスク又はコーヘン、ナトルプ等の解釋と、キヤンベル、リツター以來の着實な文獻的研究を重んじて後

期諸篇に中心を置く吾々の解釋とが如何に異るかを注意されたい。それにしてもヴインデルバントが、あれほど反證が擧げられてゐたのに拘らず依然としてソピステス、ポリテイコスの眞正を疑つたのは、又どうしたことであらうか。

尙この機會に一言して置きたいのはルトスワフスキの提唱した所謂『文體統計法』(stylometric method 上記の二著書及びStenzel, Metaphysik des Altertums, S. 104 參照)である。吾々は勿論彼の功績を認める。彼が自ら獨逸へ赴いてこの國のプラトン學者達にキヤンベルを知らしめるの勞をとつた事に對しても、特にその實り豐かなりし結果からみて、多大の感謝を惜しまない。併し乍らバーネツトの云ふやうに彼は『不幸にも "stylometry" の學を見出すことの試みに於て事柄を餘りに遠くへ推し進めた』嫌ひはないであらうか。從つてキヤンベルに目指された批判の多くは實はルトスワフスキの過度に對して向けられるべきではなかつたであらうか。

(4) Theaitetos 185d, 195dff, Sopoisths 238b.

(5) Theaitetos 196, Vgl. Epinomis 990c, (...ἀριθμὸν αὐτὸν ἀλλ' ὁ σύμπασα τύχοιτον.....)
なほ序ながら、カントが純粹理性批判 (B, S. 15—16, 205) に於て數學の判斷の綜合的なることを解明する際に之と同じ數字を用ひて居るのは吾々には特に興味深く思はれる。

(6) Menon 82—85 に於けるソクラテスと童僕との幾何學に關する問答、特に『四平方呎の二倍の平方形の邊は二呎の二倍である』又『八平方呎の平方形の邊は三呎である』などと答へた『童僕の誤まれる思斷』を參照比較せよ。

(7) Sophisths 260c.

(8) Vgl. Phaidon 96c, 101c. 『ひとが一に一を加へた時に、それに一が加へられたところの(元の)一が二になつたとか、或は加へられた方の一が二になつたとか、更に又加へたものと加へられたものとが一方を他に加へること(πρόσθεσις)のために二になつたとかいふやうなことを私は決して承認しない。それ等の各々が互に離れてゐた時にはそれぞれは一であつて決して二ではなかつたのに、それ等が相互に近づいて來た時には相互に近くに置かれるといふ此の統合(σύνοδος)に因つて、それ等は二になるといふ事柄をば私は驚き異しむ。』『一に一が加へられた時に單に加へること(πρόσθεσις)が二になることの原

因であるといふことを警戒しないか。』云々。

(9) ソピステス篇(二六三以下)に於ける誤謬に就いての此の說明は、ラスクの云ふ如く勿論不精確不充分ではあらうが、それにも拘らずプラトンの考へには結局は吾々の承認せざるを得ない正しいものがあると思ふ。

(Vgl. E. Lask, Platon, Gesmam. Schri. III, S. 48).

(10) 此のＡＢＣが上記の如く純粹な數を表はすやうな場合には普通ＣはＡＢと同次の對象であると考へられて居る。併しいま少し嚴密に考へてみるとき 4+2=6 に於て四と二との單なる集合又は總計を表はす複數 αι ἑξ は果してそれ等の眞の綜合統一を意味する獨自なる ἑξ と全然同一のものであらうか。

Vgl. J. Stenzel, Zahl und Gestalt bei Platon und Aristoteles S. 315ff.

A. E. Taylor; Form and Numbers (Gnomen II).

〃　A Study in platonic Metaphysics. (Mind XXXV, XXXVI).

H. Leisegang, Die Platondeutung der Gegenwart, S. 130ff.

尙プラトンの數論に關してはエピノミス三九以下のテクストを參照されたい。この問題の多い難解なテクストの解釋に就いてはステンツェルやテイラーによつても尙分明でない點が多いやうに思はれる。我國の識者の解明を俟つ次第である。尙又プラトン數論に對するアリストテレス (Meta physika, M, N) の誤解を主張するバーネット、ライゼガンク、テイラー等の所論の正否、更に又プラトンの微分說、地動說等に就いても識者の研究を切望する。

(11) Theaitetos 203—205. Vgl. Philebos 18c『ストイケイオンは一つ一つそれ自體では學知され得ない。』云々。Parmenidhs 137c—142a『εν ‖ εν』。尙ひとはテアイテトスの σύνθεσις や ἀσύνθετον とパイドン(七八ｃ)に於けるそれとの意味の相違に注意せよ。

(12) ibid. Vgl. Parm. 157dff. Sopo. 245aff. 更にメノン (77ff)、パイドン等に於ける『部分と全體』との敍述を參照しこれ等との相違を比較せよ。

(13) Aristoteles, Metaphysika 1024b 30—35. Sopoisths 251b—c. ソピステス二五一ｂｃの所說を直ちにアンテイステネスに歸す

(Campbell; The Soph. & Politi, of Plato, II. Raeder; Platons philos. Ent. S. 331, H. N. Fowler; Plato-Theaith., Sophist P. 393) ことに就いては異論があるかも知れないが、(A. E. Taylor; Plato-The Man & his Work, p. 386) 併しこの二五一 b c とアリストテレスの形而上學の上記の箇所とを比較してみるならば、これがアンライステネスに係はつてゐると考へることには多分の可能性があるやうに思はれる。(Vgl. W. Ross; Aristotle's Meta. p. 316—7).

(14) Vgl. Parm. 135b. Soph. 248a, 252a—c.

(15) Vgl. PoliticboS 55c—63b,

Aristoteles, Meta physika A 983a1-10,

A. E. Taylor, Plato, p. 430.

(16) 周知の如くプラトンはポリテイコス篇の初めに於てエピステーメの „διαιρέσεις" (κατ' εἴδη διαιρεῖσθαι, 概念分割) を行つて居る。先づ知識 (ἐπιστήμη) を認識的 (γνωστικὴ) と實踐的 (πρακτικὴ) との二種 (δύο εἴδη) に分ち、更に前者を分割して指令的 (ἐπιτακτική) と判斷的 (κριτική) との二つにする。而してこの中指令的の方は次第に細かく二分されてゆくのであるが後者の方はそのまゝになつて居る。私がこゝに『二つの知識』といふのは此の後者即ち純粋理論的判斷的知識 (κριτικὴ γνωστικὴ ἐπιστήμη) を、テアイテトス及びピレボスの所論を參照して二分したものである。若しも吾々が『ソピステス』『ポリテイコス』と並んで書くことに豫定されてゐた第三の對話篇『ピロソポス』(Vgl. Sophistes, 217d) を有つてゐたならば、吾々は恐らく、ソピステス篇に於ける πρακτικὴ, ἐπιστήμη の „διαιρέσεις" 及びポリテイコス篇に於ける ἐπιτακτικὴ, γνωστικὴ, ἐπιστήμη のそれに並んで、殘りの知識即ち κριτικὴ γνωστικὴ ἐπιστήμη の „διαιρέσεις" (及びそれの解明) を有つたであらう。

六

以上吾々は ἐπιστήμη = ἀληθὴς δόξα μετὰ βεβαιώσεως (μετὰ λόγου) に於て „βεβαίως" (又は λόγος) の意味を探究し、それを吾々の精神自體(ブシケー アッテー デハウテー)の作用とこれの對象との合致の『確

證』(又はそれの表明)と解してそこに知識の本質を見出した。が併し、それは必ずしも認識論上に於ける單なる模寫說や主觀的な確證說と同一視されてはならない。[1] 何故なら模寫說は模寫するものと模寫せられるものとの一致からして認識の妥當性を論じようとするのであるが、プラトンの知識論はそれ以前の研究であつて知識の本質 (τί ἐστιν;) の研究に盡きて居るし、又知識の最後の根據である『確證』も要するに直觀的體驗の事實には相違ないが、併し單なる主觀的な事實や心理的な事實ではなく、對象の本質に根ざすところの本質的明視的な事實であるから。個物を緣としそれに卽して ὄντα の本質を直視し、觀られた(考へられたのではなく)限りに於ての事物の本質を表明すること—それが彼の哲學の本來の目的であつたのである。希臘人(ヘラス)にとつては存在するものは凡て觀られたものであり觀られないものは又存在しないものであるが、βεβαίωσις とは吾々の『心の目』(ψυχῆς ὄμμα) にかゝる存在がそのあるがまゝに (ὡς ἔστιν) 現れて來ること、卽ち存在をありゝと觀たことの確證であり、ロゴスとはその眞に觀られた存在の言表(ディーロージス)に外ならぬのである。私は斯かる作用と對象との完全な一致・融合(それが究竟の眞理なのであるが)がプラトンの „μία ἰδέα“ といふ言葉によつて明瞭に言ひ表されてゐると思ふ。元來 ἰδέα とは ἰδεῖν (觀る)と

いふ動詞から來た言葉であるが、プラトンが後期對話篇の多くの箇所で "μία ἰδέα" といふ言葉を用ひた場合、吾々がこれをよく注意するならば、その中には此の ἰδεῶν といふ本來の作用的な意味が含蓄されてゐるのを氣付くであらう。それ故 ἰδέα はその本來の意味では、單なる形相又は抽象的普遍・εἶδος とは異るところの最も具體的な實在を意味せねばならない。[3] 從つてそれは決して單なる概念や推理による超越的な實體ではあり得ない。何處までも內在的で明るい觀られるもの、そして又それが同時に觀つゝあるもの—斯くの如きものがイデアの眞の意味でなければならない。或る人々の主張する如くイデアが單なる抽象概念(後期に於けるエイドス)又はそれの實體化せるものであるならば、それは觀られたものではなくして考へられたものに外ならぬであらう。かゝるものは ἰδέα ではなくして單なる νόημα でなければならない。然もそれは彼が後期哲學の出發點であるパルメニデスに於て嚴に戒めてゐるところではないか。[4]

扨て吾々の精神の力はその本性上眞なるものを愛しこれがために一切のことを爲す。(τὸς πέφυκε τῆς ψυχῆς ἡμῶν δύναμις ἐρᾶν τε τοῦ ἀληθοῦς, καὶ πάντα ἕνεκα τούτου πράττειν) 精神自體は常に露はなる存在を希求し (αὐτὴ ἡ ψυχὴ καθ' αὑτὴν ἐπορέγεται τῆς οὐσίας) 思斷

以上のもの、超ドクサ的のもの（τὸ ἀληθὲς καὶ τὸ ἀδόξαστον θεαμένη）を觀んと努める。こゝに於て吾々の精神作用は（ディアノイアによる）ドケインから（ヌースによる）イデインにまで高められ淨められねばならない。いま吾々の『心の眼』（プシケースオンマ）が οὐσία を ἰδεῖν する場合にその οὐσία にそつくり τυχεῖν したといふことは、吾々の精神（プシケー）作用イデインが限りなく存在に近づき、（Vgl. ἐγγυτάτω ἐσόμεθα τοῦ εἰδέναι）遂に完全に之に合致融合して存在をその在るがまゝに（ὡς ἔστιν）原本的に捉へ、之をあり〳〵と觀照したといふことを意味する。眞理 ἀ—λήθεια とはその言葉通り ἀ—λανθάνεσθαι であつて、存在が少しの隱れたところもなく自己本來の姿を露呈して居ることである。それ故テアイテトスにもある如く、存在に到達しない人が眞理に到達するといふが如きことは全然不可能なことである。（οἷον τε οὖν ἀληθείας τυχεῖν, ᾧ μηδὲ οὐσίας: Ἀδύνατον）從つて吾々が眞理を掴んだといふことは、存在をあり〳〵と直觀したといふこと、卽ちその存在があるがまゝの姿に於て顯現して來たといふことに外ならない。[5] 對象が觀ることによつて殘る隈なく觀照の光に照らされ、そのあるがまゝに現れてくる（κατείδηλον αὐτῇ γίγνεταί τι τῶν ὄντων）といふこと、それが τυχεῖν の意味である。吾々が精神の作用を次第に純化しその本質を實現したとき、吾々の『心の眼』があり〳〵と體驗するといふこと

ἔα とはかゝる顯はな存在の如實な觀照(テオーリア)を意味する。從つてイデアは近代人の考へるやうな推理によつて得られた超越的な實體ではなく、何處までも內在的で明るい觀られるもの、否それが又同時に觀つゝあるが如き生きた實在そのものである。作用と對象との完全なる合致を意味する ἰδέα とは觀られたものが同時に觀つゝあるが如きものでなければならない。それは宛も無邪氣なる小兒の願の如く『動かずして動くもの』(κατὰ τὴν τῶν παίδων εὐχήν, ὅσα ἀκίνητα καὶ κεκινημένα)であるかも知れない。が併しそれは事實ある(ὄντως ὄντα)のであり、かゝる "μία ἰδέα" こそ吾々の求める究竟の眞理でなければならない。從つてそれは理論哲學のテロス[6]であると共に一切の知識の根底 (αἰτία ἐπιστήμης) であり、吾々はかゝる直接明證的なイデアに導かれることによつて初めて吾々の凡ての認識が可能になるのである。[7]

(1) 勿論プラトンの知識論には模寫說的な考へも多分に含まれて居る。併し乍ら認識が作用と對象との何等かの關係の上に成立つと考へられる限り、認識の究竟的意味に於ては模寫說的な考へは何等かの形で潛まざるを得ぬのではないだらうか。

(2) 希臘に於ける οὐσία, ὄν, ἔστι 等の言葉は、假令それが一切の事物の上にあるところのもの (ἡ οὐσία γὰρ μάλιστα ἐπὶ πάντων πρῶτον) を指してゐるやうな場合でも、今日普通に云はれて居る「存在」とか「本質」とかの概念とは可なり趣を異にしてゐるといふことを忘れてはならない。

Vgl. J. Stenzel, Metaphysik des Altertums (1931).

(3) エイドスと區別されたイデアの意味に就いては拙稿『プラトンのイデアに就いて』(哲學研究一六四號)參照。

バーネットが明にしたやうにテイマイオス五一cを除けば後期諸篇に於て、εἶδος なる言葉が普通知られてゐるやうな初期の術語的な意味に用ひられて居る箇所は一つもない。而もテイマイオス五一cがプラトン自身の所説でないことはバーネットの充分證明するところである。(Vgl. J. Burnet, Greek Philosophy Part I, 及び Platonism, P. 44—51).

(4) Parm. 132b.

Vgl. Lask, Ibid. S. 52. 17ff.—「Idee は縱 ἀσώματον とは云はれて居るが物體に對する單なる精神的なものではない。」從つて「イデーは概念的思惟の所産ではなくして、ただ觀られるところのそれ自身に妥當するものである。」

尙ステンツェルは「プラトンの著作に一貫せるものは事物を觀て之を學的に捉へんとする (die Dinge zu sehen u. wissenschaftlich zu erfassen) 一つの著しい特色ある形式であり、この形式こそがイデーであり直觀である (diese Form ist die Idee, die Anschauung)」と云つて居り、又リッターは「イデアとは一つの事物に於て—それが感性的なものであらうと或は又非感性的のものであらうと—正當に理解されたものである。それは單に拙劣に判定する悟性の誤つた關係定立によつてそれの上に置かれ若しくはそれに附着された覆ひや添加物からは解除されたところの、それの基本に於て表象されるものである。」と云つて居る。(Die Kernged. d. plat. Philos. S. 150ff.)

(5) 從つて虛僞とは吾々の『心の眼』が曇つてゐて、存在が自己の本來の姿を蔽ひ隱して居るといふことを意味する。アロドキシア、ヘテロドキシア、パラドキシア等は凡てこゝに基因するのである。

(6) Vgl. Aristoteles, Metaphysika 993b. 『哲學は眞理の知識である (τῆς φιλοσοφίας ἐπιστήμην εἶναι τῆς ἀληθείας) といはれてゐることは正しい。何故なら理論的知識のテロスは眞理であり實踐的知識のそれは行爲である (θεωρητικῆς μὲν γὰρ τέλος ἀλήθεια πρακτικῆς δ' ἔργον)から。』

それ故ハイデッガー (Sein u. Zeit S. 34) は云つて居る。哲學的認識としてのイデア說と云ふが如きものゝ可能性は、一般に希臘の眞理概念からのみ理解され得るのである。

(7) 吾々にしてこのイデアをしもなほ疑ひ、そして認識のこの最後の基本的事實をば神祕的又は不可能と解するならば、吾々の哲學的思惟はこゝに全く根ぎにされ終るであらう。

これは東京に於けるプラトン・アリストテレス學會、三月の例會で講演したものに多少補正を加へたものである。學究には都合の悪い仕事に携はつてゐるため、充分な思索も推敲も出來なかつたが編者の勸めに從つて發表することにした。大方の叱正を乞ふ次第である。(一九三一・一〇・二三)